

人形の展示・公開

山形では、農繁期と重なる端午の節句には人形を出して愛でる余裕がないため、3月にひな人形と五月人形を同時に飾ることがありました。喜作家でも平成18年ごろまで、ひなまつりの時期には母屋の8畳二間にすべての人形を展示していました。しかし、当主が遠方に移り、母屋が取り壊されたこともあり、十数年展示されない状態が続きました。

現存する6畳間を会場に、少しず



平成9年の展示の様子(合成)

母屋の8畳二間をいっぱい使って展示していました

つ入れ替えての公開を始めて3年目、今年は歌舞伎や能を題材にした人形や、日清戦争という当時の時代を表した人形を展示します。雪章手作りの人形は、今年ですべてを展示し一巡したことになります。

内裏雛と金屏風

「^{おだいり}大内裏 殿」「^{おだいり}大内裏 姫」は大正9年～12年にかけて作られました。首、手、冠は東京日本橋にあった「玉真人形店」で作られたものです。大正13年には、弟子の石山太柏(東根市出身)による「金地柳櫻之圖 御雛屏風」を詠えました。女雛の裳(女子の正装の時に袴の上に腰部の後方だけにまとうもの)には、鳳凰と梧桐が手描きされています。また、両脇の「左近の櫻」と「右近の橘」も雪章の手作りです。

- 女雛の後ろ姿 梧桐には鳳凰が住むとされる
- ↓ 白枠内が今年の展示



能人形

「^{ゆや}熊野」「^{しゃつきょう}石橋」「松風」の各演目の重要な場面が表現されています。この4体について「頭も面も桐の木にとの粉を塗り、その上に胡粉を塗って製作したもの」と記録が残されています。東京の老舗人形店から取り寄せた内裏雛の頭と比べて、手づくりの素朴さが見てとれます。箱書きによると「^{ゆや}熊野」「^{しゃつきょう}石橋」は、雪章が亡くなる前年に完成しています。

能人形「松風」



どんなお話？ ^{ゆや}熊野

花見車に乗っているのは、平宗盛の寵愛を受ける娘、熊野。ある日、故郷から母の病状が悪く帰郷を促す手紙が届きますが、宗盛はこれを許さず花見の同行を求めます。車から見る都の春は華やかでも、故郷の母を思うと、熊野の心は沈むばかり。酒宴で舞う中、急な村雨に散る桜を扇で受け止め、母の命を惜みます。舞を止めた熊野が詠んだ和歌「如何にせん都の春も惜しけれど馴れし東の花や散るらん」に心うたれた宗盛は、ついに帰郷を許すのでした。

どんなお話？ ^{しゃつきょう}石橋

舞台は中国の清涼山。仏跡を巡る寂昭法師が石橋に着くと、一人の少年が現れ諭します。橋の向こうは文殊菩薩の浄土だが、数千メートルの深い谷にかかる石橋は狭く苔むして、容易に渡れるものではない、と。少年が去ると、橋の向こうから文殊菩薩の使いである獅子が現れ、牡丹の花に戯れ舞い踊ります。歌舞伎「連獅子」では、親獅子が子を谷につき落とす故事にならって、赤が親、白が子とされ、長い毛を勢よく回す毛振りが見どころになっています。

どんなお話？ 松風

罪により須磨に流された在原行平は、二人の汐汲み女と出会います。姉妹は松風・村雨と名付けられ、行平と恋仲になりますが、3年後行平は都へ帰ってしまいます。時が経ち、旅の僧の前に亡霊となった姉妹が現れます。月明かりの浜辺、二人は水桶に映った月を見て、行平が帰ってきたと喜びます。松風は、行平の形見の烏帽子と狩衣を身に着け、松の木を行平に見立てて狂おしく舞いはじめます。夜が明け姉妹の魂が去ると、浜辺には松を渡る風と波音ばかりが残るのでした。

あまのいわと 押絵人形「天岩戸」

洞窟に隠れた太陽の女神アマテラスオオミカミが、再び姿を現す場面が有名な日本神話です。この人形は背景を舞台装置のように作り込んで人形を固定していることが特徴です。岩や地面は無垢の木材に彩色を施しています。押絵でありながら立体感にこだわり、神話の臨場感ある表現に工夫を凝らしています。

日清戦争

富国強兵の旗印のもと、異国に負けじと突き進んだ明治時代。当時、軍神大将の姿が押絵として多く作られ、敬い飾られたそうです。敵国兵と対峙し剣を振りかざす動きのある人形は珍しいようです。敵兵の陰い表情や金糸の緻密な細工も注目です。

押絵人形「碁盤忠信」

源義経の身代わりとなり、碁盤を手に戦った佐藤忠信の伝説がモデルとなっています。明治時代には歌舞伎や映画も作られました。着物の下には、太刀とともに義経から拝領した鎧を着ているのがわかります。かなり立体的ですが人形の背面には意匠を施していない押絵人形です。人形の台にも彫り込みや縁取りがあり、特別な思い入れが感じられる作品です。



「碁盤忠信」下絵



柏倉喜作家 ひなまつり 2024 リーフレット

2024年3月発行

作成 NPO 法人 柏倉家文化村

山形県東村山郡中山町岡17 (みんなの居場所 おかえり 岡縁里)

TEL (023) 666-3900

公式サイト →



2024 柏倉九左衛門家ひなまつり 第3会場

柏倉喜作家 ひなまつり

— 能・歌舞伎人形 —



押絵人形
「碁盤忠信」

柏倉雪章と人形

柏倉喜作家は、柏倉九左衛門家のカマエ(一族)で、喜右衛門家から1817年に分家しました。屋号でカネキとも呼ばれます。

人形を作ったのは、喜作家第4代当主 柏倉雪章(明治11年~大正14年 本名:喜十郎)です。中山町小塩生まれの画家、小松雲涯に弟子入りしたのち、上京して川端玉章に師事しました。玉章より一字を戴き、画号を「雪章」としました。当主として

の役割を担うためこの地に戻った雪章は、47歳で亡くなるまで絵画の世界に留まらず人形や切り絵、住宅意匠など多方面で活躍しました。

雪章の人形作りは、姉のきよが作っていた押絵人形を手伝ったことがはじまりのようです。主に「押絵人形」と「衣装人形」ですが、その中間ともいえる表面は立体的な作りで背面は平面的なものもあります。人形はひな人形をはじめ、六歌仙、能や歌舞伎、故事にならったもの、優美な五節舞人形など多岐にわたります。